

デスチュ・ドゥ・トラシの産業主義

津 田 内 匠

I

数々の重大な政治抗争に彩られたフランス革命も経済の面では停滞と混沌の10年であったかにみえるが、激しい政治抗争のかけで、新しい経済と経済学を求める動きは着実に進められていた。革命後のセーの経済学に結実する産業主義がそれである。しかし産業主義の系譜ともいべきものは、細かい定義を別にすれば、フランスでは革命以前からすでにあった¹⁾。それは対外的にはイギリスとの対抗として、また国内では重農主義との対抗としてである。たとえば、コルベール主義と重農主義、あるいはグルネの国内での自由放任と対外的保護主義の両面政策とケネーの絶対的自由放任の対抗関係がそれである。カンティロン地主と企業者の経済学はそれ以前の両派の総合であり、それ以後の両派の対抗の理論的淵源であったとみてよいであろう。

しかし産業主義と重農主義は単に対立したのではない。両派はともにイギリスへの対抗という共通の状況下にあって、しかしそのために全く相反するディリジスム(政府主導)を必要とした。前者は国民的産業の保護という現実的政策によって、後者は農業優先の「純生産物」論体系から来る絶対的自由放任という観念的政策によってである。重農主義の絶対的自由放任をディリジスムと呼ぶのは奇異に思えるかもしれないが、たとえばデュボン・ドゥ・ヌムールによって強行され、その失敗が革命の一因ともなったイーデン条約(1786)を考えれば容易に理解できるだろう。デュボンはイギリスとの対抗と妥協を口実に産業主義のディリジスムを否定して、絶対的自由放任という観念の至上命題を貫徹し

た。そしてその結果はフランス産業の壊滅であった。こうしてイギリスへの対抗という状況はいっそう深刻となったが、北部フランスを中心とする産業者たちは危機にありながら政府に対外的保護を求めず、機械化等の努力によってかえって自立の転機を得た。それはまた、それまでは主として対外政策を意味したディリジスムがこの時点からしだいに国内経済の改良指導に向けられるようになる転機ともなったのである。

革命期のさまざまな政治抗争の根底にあったものは土地所有と動産所有の、そしてまた所有と非所有の二重の利害対立であった。産業主義はこの二重の利害対立のなかで形成される。それはまず所有そのものを否定する平等主義(暗にロベスピエール等の革命指導者たちを指す)の幻想を批判し、ついで地主の所有の絶対的優越を主張する重農主義の復活を批判し、「自由・平等・所有」という革命と人権宣言の精神に沿って、ともに「所有という絶対資格」を有する市民が自由かつ平等な立場で協同する産業社会を重農主義の対極に構想するのである。

革命期の産業主義はつぎの三つの段階の議論で構成された。まず91年段階でルソーの平等な権利による政治的結合という社会契約の理念を労働と所有とにもとづく現実の経済的結合に転換して、各人に労働の成果を保証する「アソシアシオン」を確立すべしと説くモグラスの「人間的アソシアシオン」論。つぎに95年の総裁政府の成立前後に、土地所有者のみを市民とし、非土地所有者を非市民とするガルニエに対して、不動産であれ動産であれ、あるいは産業の技術や知識であれ、すべての者がなんらかの所有者であり市民であり、これら三つの所有者階級のうちの動産(資本)と産業技術・知識(勤

勞)の所有者階級が生産を主導し、生産の拡大をととして分配の不平等を限りなく縮減していくというレドレルの「三所有者階級」論と「労働の制度」論。そして最後に96年の総裁政府のもとで、レドレルの産業主義に、奢侈と貨幣の効果を重視するジェイムズ・ステュアートの有効需要論を加えて、政府による「人為的欲求」の開発というディリジズムによって産業主義のいっそうの組織化と大衆化をはかるヴァンデルモンドの「政治経済学」講義であった。

彼らは市民革命下での新しい産業主義の展開に共通してスミスの経済学を実践的に用いた。実践的にというのは、彼らは必ずしもスミスを全体として、あるいは正確には理解していなかったにもかかわらず、主としてスミスの分業論を軸に、「アソシアシオン」という市民革命の新しい結合の原理によって組織された産業の経済学をまさに実践的に準備したということである。

革命末期の総裁政府からナポレオン体制へかけての産業主義は、生産力や政治の状況に対する判断のちがいがから、政府のディリジズムを求めるものとこれを斥けるものとが併存した。ディリジズムは市民革命を通じて市民の自立的結合の原理であるアソシアシオンと対立することなく接続しうるものとなったからである。そしてナポレオン体制から王政復古にかけてのイデオログの産業主義はその政治的自由主義の立場から政府の非介入を強く主張しつつ、しかしそれだけにいっそう産業的企業者を中心に広範に組織された経済と経済学の新編成を求めた。セーとデスチュ・ドゥ・トラシの産業主義がそれである。セーをスミスの経済学の単なる「祖述者」あるいは「俗流経済学」者とする評価は全く当たらない。セーはスミスの十分な理解者であるとともに、いまその前史をふりかえったフランス産業主義の集大成者である。そしてトラシはセーの継承者であった。紛れもなく市民革命の成果として出現した産業主義がいま新たに産業革命といわゆる初期社会主義の出現を予感しつつ、それらに備える段階にあったのである。

II

デスチュ・ドゥ・トラシ²⁾は1754年、軍人貴族の家系に生まれた。彼も軍職についたが、青年時代はむしろモンテスキューやヴォルテールを読み、百科全書派のフィロゾフたちを尊敬する文人のように過した。しかし革命前夜には彼は地方議会の創設にかかわり、全国三部会には貴族身分代表として参加した。革命期に入ると、彼は国民議會議員として封建の特権の廃止や人権宣言の採択に積極的に加わり、リベラルな穏健派「1789年の友の会」に加盟して、コンドルセ、シエイエス、それにイデオログ最大の盟友となるカバニス等と識り合った。

1791年秋、彼は憲法制定議會終了後、帰郷して国民衛兵軍に入り、また県行政評議會議長を勤めた後、再び軍にもどって対オーストリア戦を指揮したが、ジャコバン派に彼の忠誠心を攻撃されて軍を辞し、92年夏、パリ効外オートゥイに居を構え、エルヴェシウス夫人のサロンの常連たちと交流し、とくにカバニス、コンドルセとの交友を深めつつ、数学や自然科学、とくにラヴォワジェの研究に熱中した。

しかしジャコバン派の追及は厳しく、彼は93年11月に逮捕・投獄された。彼は獄中でも研究に没頭し、短いメモを残した。「ラヴォワジェが私をコンディヤックに導いたのだ。以前に彼の『人知起源論』だけは読んだが、そのときは満足すべきかどうかかわらなかった。私はカルムの獄で彼の全著作を読んで、ロックにまでひきもどされた。彼らはいっしょになって私の目を開いて、私が求めていたものがなんであったかを教えてくれたのだ。それが思考の科学であることを私ははっきりと知った。とくに『体系論』は私には一条の光であった。そして『感覚論』は完全でもなく誤りを免れてもいないとわかったので、私は自分のために思考を分析して、それによって得られた主要な真理を短い解説にまとめた」(Head, B. W. p. 10)。ここには彼のその後の活動の出発点が簡明に述べられている。

ロベスピエールの失脚後、彼は総裁政府のも

とで国民教育行政にかかわり、学士院会員にも選ばれて、やがて彼の主著となる『観念学(イデオロギー)要綱』の基本部分を国民教育のカリキュラムの一部として執筆し、1801～05年、この主著は認識論・文法論・論理学の三部作として出版された³⁾。彼は1804年ごろから同じ学士院の外国人会員であったジェファーソンと書簡を交していたが、そのある書簡によれば、『観念学要綱』はつぎの三部作、道德論・経済論・政治論の基礎となるものであった。また彼は多分ジェファーソンに依頼されたのであろう、1809年には『「法の精神」評論』を書いて、その手稿をジェファーソンに送った⁴⁾。このなかには、本稿で扱うもう一つの主著『経済学要論』にやがて吸収される奢侈論・商業論・貨幣論・人口論等の諸章が含まれている。しかしこの労作は単になにかの準備のためのものではなく、すでに彼の政治的自由主義の立場を鮮明にしたものであった。彼の執筆の狙いはもちろんモンテスキューの封建性と形而上学性を批判することであったが、そこには同時にナポレオン批判の意図もこめられていた。

『「法の精神」評論』は1811年、ジェファーソンの熱意で英訳版がアメリカで出版された⁵⁾。トラシはまた『経済学要論』、正確には『観念学要綱』第四部『意志とその諸結果』を1810-11年ごろに脱稿して、この手稿もジェファーソンに送った。彼はそれがナポレオンのもとでは出版できないと考えたからであるが、アメリカで英訳に手間どっているうちにナポレオンが退位して、それを待ちかねたように原版が1815年、構想どおりの『観念学要綱』第四部として出版された。その後英訳版は『経済学要論』として1817年に、また原版の単行書も『経済学要論』として1823年に出版された⁶⁾。しかしトラシは『経済学要論』を書き上げたころからほとんど失明状態となり、予定していた道德論と政治論(あるいは社会組織論)はついに完成をみなかったのである。

ナポレオンの退位後、彼は新憲法起草委員に選ばれ、複雑な政治状況のなかで、それが民衆の要求であるかのようにブルボン家の王位復帰

を求めた。当時イデオログの仲間たちはことごとく公職から退けられる政治状況にあったが、彼はひとり貴族院議員に指名され伯爵に叙せられた。1836年、没。

III

彼の生涯からも知られるように、彼の『経済学要論』の最大の特徴は、それが『観念学』体系の一部として書かれたことである。彼自身が高んどもそのことを読者にことわっている。「観念学」とはトラシがコンディヤックの『体系論』に従い、同じくコンディヤックの『感覚論』を改良しつつ、厳密な「観念の体系」を整えて、そこに一体としての精神科学の「確実性」を保持しようとする、トラシが創始し命名した学問である。彼の知的サークルの人々は後にイデオログと呼ばれたが、この呼称は一般に広く用いられて、コンドルセもレドレルも、セーもまたイデオログとされるのである。

彼らの活動は大きくは前後二つの時期に分けられる。前段階の革命初期には彼らは積極的に政治にかかわり、革命をとおして人間の自然権をとりもどすことをめざした。コンドルセがその代表例である。彼は93年憲法草案を作り、また国民教育計画案等によって民衆の「平等」の要求に誠実に応えようとした。しかし革命の後半には彼らの民衆への信頼は揺らぎ、彼らも権力の恣意と専断を嫌って政治と遮断し、人間の全存在を専ら「観念の体系」のうちに確認しようとしたのである。トラシが代表例であり、彼の獄中メモがよくそれを象徴している。

ではトラシの「思考の科学」の導きとなったコンディヤックの『体系論』とはなにか。コンディヤックが『体系論』でめざしたのはデカルトやマールブランシュ等の形而上学(明証論、渦動理論、機会偶因論等)を排除し、科学的推論を可能にする「真の体系」を築くことであった。彼によれば、「体系とはある技術または科学のさまざまな部分がすべて互いに支え合い、その最後のものが最初のものによって説明できるように配列されている」ものである。この「最初のもの」は「観察」によって「十分に確証され

た第一の事実」であるべきであり、そうであればこそ、この事実が「体系の原理」とされるのである⁷⁾。

確かに彼はここでは形而上学を排除するために「観察」による帰納を強調している。しかしそれは彼の演繹の始点におかれるべき「原理」を確定することにかんしてである。彼は「観察は手探りでしか行われぬ」という。しかしひとたび「原理」が確立されれば、そこからすべてが演繹できると彼は確信していた。「真の体系」によって「諸現象の連鎖」を厳密にたどれば、認識の世界から超越的なもの、絶対的なものはいっさい排除できると彼は信じたのである。しかしジェームズ・ステュアートは「フランス人のいう体系なるものの弊」について、過剰な演繹が「僅かばかりの基本原則から引き出された不確実な結論の連鎖」を生み、それが「情況の多様性」を無視して適用されて「単なる独断」に終る危険を指摘している⁸⁾。コンディヤックが「単なる独断」に陥ったとはいえないまでも、過剰な演繹がステュアートの危惧を当を得たものにしていることは確かである。これはトラシについても同様である。

IV

トラシは『経済学要論』をセーに倣って生産・分配・消費(租税・公債)の諸論で構成し、それに最も長大な「序論」、つまり『観念学要綱』第四部としての「意志論」を付した。全編はほぼセーの経済学の基本線で貫かれているが、この序論でトラシはセーの方法とは全く異なる独自の演繹の手法を示している。これが彼の「観念の体系」であり、『経済学要論』の以下の本論を深く基礎づけるものである。ここから始めなければならない。

トラシはコンディヤックを「精神の動きを一つに集めて初めて学説にした人」と高く評価したが⁹⁾、まずはつぎの点で批判せざるをえなかった。「人間をただ印象の受動的な存在とだけみるべきではない」ということである(以下、1823年版のページのみを示す。2)。コンディヤックは人間の知覚によってまず「注意」の意識を持

ち「必要」を感じるという。しかしその「必要」とはただ「欠如」を感じることであった。コンディヤックの感覚論では一体に感覚の受動性が強調される。コンディヤックには彼が批判するマールブランシュの機会偶因論を脱しきれないところがあった。これに対してトラシはコンディヤックの「注意」を「意志」に変え、人間は意志によって欲求し、その充足を求めて他に働きかけるとして、コンディヤックの受動的感覚論を能動的意志論に転換したのである。彼によれば、意志とは人間の感性と存在そのものから生じる力であり、行動し選択する力である(6-7)。彼は意志する力からすべてが始まるという。まず欲求と充足の手段が生じ、欲求とともに権利の観念が生まれ、同時に専ら自己自身の欲求充足の手段を増やそうとする義務の観念が生まれる(60-61)。欲求をみたすために「肉体的知的諸力」(91)が用いられ、そこに労働の観念が生まれ、自己の欲求に従って諸力を用いることから自由の観念が生まれるのである。彼によれば、もともと欲求充足の手段を持つこと自体によって所有の観念が生じるのだが、この所有の観念は他と区別して自己を感じる自我の意識＝人格の感情に根ざし、したがって万人に備わるものであるとともに、行動し選択する意志の力によって、それはまた本性的に排他的である(10-16)。そして富とは欲求充足の手段を持つことであり、その意味で労働は我々の唯一根本の富である(63)、等々と続く。

トラシはこうして意志と欲求にもとづく諸観念の系列を明らかにしていくのだが、著者自身が形而上学的と認めるように(324)、少々わかりにくい。それらは少なくとも経済学のタームとは異なるものが多いのである。彼はそのことに気づいていて、著者の意図は経済学の詳細を論じることではないという(323)。確かに彼は経済学の細部は論じなかった。しかし彼がその特異のタームを経済の諸事象に適用することに禁欲的であったわけではない。彼は自分の「観念の体系」に絶大の自信を持っていて、むしろ積極的に現実の諸矛盾を彼独自の観念のタームで包みこむところがあった。

上記の観念系列を、所有の観念を中心にもう一度、整理してみよう。そこにトラシの産業主義の基本線がみえるはずである。彼の所有の観念は三つある。第1は人格の感情に根ざし万人に備わるもの。第2に欲求することは権利であり、この権利を果すべく欲求充足の手段を持つことが自分自身に対する義務であり、この義務を果すこと、つまり欲求充足の手段(労働)を持つことが所有である。第3に意志の力による所有は本性的に排他的所有である。第1の人格的所有は生存権、第2の手段(労働)の所有は労働権、第3の排他的所有は通常的所有権を意味するのであろうか。とすれば、この三種の所有の観念は人権宣言の所有をめぐる自由と平等の権利を、少なくとも観念の上ですべて認めたものとなる。トラシはこの三つの関係については述べていないが、彼は第2の観念によって地主のみを所有者とする重農主義を批判し、同時に第3の観念によって平等主義と博愛主義の偽善と欺瞞とを斥けるのである(20-21)。しかしこのように所有の観念がすべて同等に人間本性の根元において、これほど一般的に、かつ個人主義的に規定されると、所有をめぐる対立は調和できない。生産にすべての所有者がかかわることはできても、分配にすべての所有者がかかわることはできない。そこでトラシは万人が所有者である以上、所有の尊重と産業の振興とによる生産の拡大にすべての人の共通の利益があると説くのである(183)。ここでは人格的所有と排他的所有とが意識的に同一視されている。

では労働についてはどうであろうか。彼はスミスに従って、労働はすべての価値の唯一の源泉であるといい(91-92)、またセーに従って、労働はすべて効用を生むがゆえに生産的であるという(82)。どちらも農業のみを生産的とする重農主義批判であり、すべての労働を産業的企業に組織する産業主義の主張である。彼はまた労働は二つの価値を持つと指摘する(63, 91, *passim*)。一つは「自然的必然的価値」、これを彼は労働者の生存に不可欠な「欲求の総計」あるいは「欲求充足に必要なものすべての価値」と説明する。他は「偶然的とり決めの価値」、つ

まり労働が生みだす効用の市場価値である。彼はスミスによって労働価値をいい、セーによって効用価値をいい、両者の関係を明確にしないと批判されるのだが、彼はそもそも価値論をスミスやセーのように、彼の経済学の根幹とはしないのである。彼にとっては、欲求充足のために「諸力」を用いること、すなわち労働は自分自身に対する義務であり、その労働のみが価値を生むという一事が最重要であり、それによって彼は無為と奢侈の地主(不生産)階級に、労働者と企業者の生産階級を明確に対置することがなによりも必要であったのである。しかし彼によれば、欲求充足の手段(労働)を持つことはすでに所有であり、価値を生む労働はすでに唯一根本の富であるのだから、不生産階級の地主に対する生産階級の賃金労働者と企業者はともに富の所有者であって、この両者の間には本質的に敵対的な関係は存在しないのである(222)。トラシは無為の地主階級を排除するために、この図式的階級対置を示したのだが、そのとき同時に彼は地主階級の排除よりはるかに重要な生産階級内部の利害の対立を基本的に否定して、企業者の利潤の源泉を見失ったのである。

V

すでにみたように、彼の義務の観念は本性的には決して相互的なものではなく、専ら自分自身の欲求充足にかかわるものであった。しかしこの義務の観念だけでは社会は形成されない。彼は本論に入るに先立って、多分スミスから学んだであろう本有的な「同感性向」を用い(66-67)、これを義務の観念に結合して即自対自の協同の世界をみいだすのである。彼は現状の社会をすでに自然的必然的状态とみているので、前世紀のフィロゾフたちのように、自然状態から社会状態への移行の説明に苦慮したわけではない。彼は社会の特長は、諸力の協同、文化の増大(物質生産の蓄積されたもの)、そして分業にあるという(80)。そこで彼は専ら自分自身のための欲求手段の増大という、いわば個人主義的な醒めた目で、各人が力を協同させ、かつ広範な分業によって各人の手段をそれ以前より

いっそう増大させることを目的とする社会の形成をめざすのである。

トラシは、社会は絶えざる交換の連続であるという(68)。ではなにを交換するのであろうか。彼によれば、それはセルヴィスと賃金の交換であり、商品と商品の交換であり、共同の労働によって得られた共同の効用の自分のとり分の交換であり、要するに効用の交換である。その効用を生むのは労働であり、このあらゆる労働の産業的組織を、トラシは第1部の「生産論」として論じるのである。

トラシの生産論の基本はほとんどすべてセーの経済学から来ている。生産とはなにかについて、セーはチュルゴよりもスミスよりも強い光を、とくに重農主義のイリュージョンを破る強い光をあてた、と彼はいう(81)。つまり生産とは物に効用を与えることであり、効用を生む労働はすべて生産的である(82)、と。トラシがセーに加えたものは、すでにみたように、効用を生産する労働に唯一の価値の源泉をみたことであり、またそれによってセー以上に重農主義を激しく排撃したことである。トラシの労働価値説は価値論としては貫徹しなかったが、彼の重農主義批判は生産・分配・消費のすべての議論において過剰なまでに徹底して、その指導力を専ら企業者に集中させる彼の産業主義の純化を特徴づけるのである。

彼によれば、社会はあらゆる効用を生みだす生産階級となにも生産しない不生産階級とに分れる。前者は農業者・製造業者・商人であり、後者はただ地代収入で生きる無為の地主たちである。彼らの地代は産業者の利潤からの控除分であり、彼らはその地代を貸しつける金貸しにすぎない(87-88)。セーは生産にかんする地主の積極的役割は認めなかったが、土地の力を生産要素の一つとして認めた。しかしトラシは土地は資本の一種にすぎないとして、土地そのものを生産要素としては認めず、また地主の資本家機能もここでは無視する。地主は重農主義理論とは全く逆にただひとり不生産階級である。

セーによれば、人間はなにも創造しない。ただ加工し、輸送して効用を増大させるだけであ

る。トラシはこれに従って、すべての産業を、それによって効用を増す形態の変化と場所の移動としてとらえ、農業は製造業の一種であり、商業はその広域の交流によって新しく多様な産業を提供すると理解している(Ch. IV・V)。ここではもはや農業は重農主義の神秘的な用語によって特別な栄光を担う「第一の技術」でも「唯一の技術」(126-127)でもなく、商業は重商主義理論によって他国の犠牲の上に立つ「幻」の利益をもたらすものではない(134-135)。

トラシはこの産業を組織する原理をセーから引き継いでいる。それによれば、すべての産業は1)まず使用可能な物の性質とそれを支配する自然の法則を知る理論、2)それによって有用な結果をひき出すための、この知識の応用、3)その目的を達するために必要な労働の実行、を必要とする。理論は学者により、応用は企業者により、実行は労働者によって担われる。しかしこの三者は自然的には分離する傾向にあり、またいずれもその活動に前払いを必要とするのであるから、企業者が資本を調達して学者と労働者とを雇用し、絶えず販路を求めつつ全体を統括し指導するのである(97)。トラシはこの企業者をやがて「政治体の心臓」と呼び、彼らの資本を「血液」と呼ぶのだが、ここでは資本をあえて先行労働の「節約」と呼び(99)、企業者の利得の適正な僅少さ(124)と不確実さ(102)とともに、彼らの資本形成の重要性を訴えて、無為と奢侈の地主との対照を強調するのである。

VI

トラシは生産の問題から分配の問題へ目を転ずると、展望が一変するという。人類はマスとしては富裕で強力で、日々、資源と生活手段とを増大させていくが、これを個人のレベルで見れば、生命体として苦しみ、ただ死の終末をおくらせるだけの姿しかみえないというのである(176-177)。これまで、革命期に形成されてきた産業主義はレドレルにしてもヴァンデルモンドにしても、分配の公正をめざして、しかし結果は生産第一主義に終わった。セーの場合もまたそうであった。哲学的には過剰な演繹によっ

て諸観念の系列をつぎつぎと繰り出し、生産論ではそのほとんどをセーに依拠したトラシであったが、彼はここに来て初めて、冷厳な事実を目の当りにした。産業主義が絶えず自らのかげに隠してきた貧困の問題を直視しようとするのである。

彼は生産の成果が、不平等にしか分配されていないことを認めざるをえないという(177)。しかし所有は本性的に排他的であり、不平等は不可避であって、この不平等は本性に由来するものであるという。したがって彼は文明とともに進行する貧困の原因を社会の根本の制度のなかに探究しようとはせず、ただ現象的にこれまでの政府がギルドに特権を与え、政府と癒着して貧民を賃金労働者としても消費者としても犠牲にしてきたと指摘するだけである(182-183)。そのみならず、まえにも述べたが、彼は同時に、我々は常にさまざまな利害を持ち、ひんばんにその社会的役割を変えるし、また我々はみな所有者であり消費者であるのだから、我々は所有権が尊重され、産業が完成されることに共通の利益を持っているのであると強調して、この不平等の問題をオブティミスティックな産業主義の未来に転ずるのである(183)。分配論においては、トラシはオブティミズムとペシズムの間で激しく動揺する。そのなかで彼は二つの問題を提示している。一つはマルサスの人口論にかんしてであり、他は賃金基金説についてである。

トラシはマルサスの人口論を「最も深く極めた」と高く評価している。しかしこの問題についても、彼の対応はオブティミズムとペシズムとに分裂している。彼はマルサスを支持しながら、同時にマルサスのペシズムをオブティミズムに転換したセーの説にも従っている。セーはマルサスの人口の増殖は食糧に制約されるという説を逆転して「真に人口増加を奨励しうるのは多大の生産物を与える産業である」と理解した¹⁰⁾。これを受けてトラシは食糧を意味する「生存手段」と広範な産業が提供するさまざまな資源を意味する「生活手段」とを区別して(123-129, 189)、近代社会においては「人口

は常に生活手段に比例する」と考えたのである(193)。これによって彼は人口問題が解決すると思ったのではないが、少なくとも人口問題は産業の自由で穏やかな発展との関係でみるべきものとオブティミスティックに理解したのである。

とはいえ、トラシがマルサスの人口論から受けた衝撃は深刻であった。とくに産業が一定の発展段階に達すると、すべての国民において人口の停滞あるいは後退が必ず生じるという事実を彼は否定しうべくもなかった。人口の増殖が社会のあらゆる階層で生じる。最下層民は必需品を奪われ、他に移動する場所もなく、貧困に打ちひしがれる(199)。この現実を前にしては、彼もマルサスに従って、貧民の増殖の自己抑制を認めざるをえないのである(197)。

人口問題にかんするトラシのペシズムは彼の賃金基金説にもみられる。彼によれば、社会は前払いを持たない賃金労働者と彼らを雇用する人々の二階級に分かれる(200)。前者は後者の割り当てる額によって雇用される。その額はほぼ一定である(202)。そして雇用する階級も二種類である。一つは専ら利子や地代だけで暮す地主であり、他は産業的企業者である。前者の利子や地代は後者の利潤からの控除分にすぎないのであるから、前者の支出する賃金総額の増大は後者の企業活動を妨げるだけである。一方、企業者も企業活動に失敗することもあり、成功すれば地主化することもあり、また販路の拡大にも限界がある(201)。企業者の側の雇用の原資も容易には増えないのである。それにまた、企業者が地主化して地主が増えれば、彼らの一部は企業活動にもどされ、それがまた企業者の一部を賃金労働者に転落させるとすれば、結局、賃金労働者にとって越えがたい限界は総人口の限界である(202)。

こうしてトラシは人口と賃金基金の二重の制約のなかで、貧民の深まる窮乏をみつめざるをえない。貧民とは「単純な賃金労働者」のことであると彼はことわっている(203)。そこで彼は「あらゆる利益のなかで貧民の利益こそ常に最も考慮されるべきであり、常に最も尊重さる

べきであること」(203)を、人間性と正義と政治の観点から指摘する。人間性の観点というのは、企業者や富者の利害は余裕のある相対的なものだが、貧民の利害は「生存の可能性、消滅の必然性、生か死かの問題」をかけた絶対的なものであるから、このような限界ぎりぎりの利害を単なるご都合やバランスにかけけることは許されないということである。また正義の立場は常に多数者の利益を考慮すべきであり、最下層階級の者こそどこにおいても最大多数である。階級間に対立があれば、この階級の利益こそが優先されるべきである。そして政治の観点からいえば、多数で強力であることが国民にとっての利益なのである(203-204)。

トラシはこの最下層階級に無知や犯罪が多いことを認めながらも、この階級の者こそ盗人の名に耐えがたいほどの最も高潔な所有の観念の保有者であり、もしも動産や不動産の所有を重大とするのであれば、彼らが「人格」の所有者であることもまた重大と認めるべきである、と貧民の立場と人権を全面的に擁護する(206)。貧民の賃金の要求は「激しい」が、賃金鉄則の重圧のもとにある彼らの永続的な利害からすれば、それが不当な高賃金の要求であることはありえないのであって、むしろ上層階級が、そして小さな作業所の親方までが貧民に低賃金を強いて「暴力も辞さない」状況や彼らの経営の不手際と無知と怠惰こそ攻撃されて然るべしと彼はいうのである(207-208)。

確かに激しい階級的対立が現実にはあった。だからこそ彼は富者も貧者もそれぞれの立場を暴力的に固定すべきではないと説くのであったが(210)、しかし彼はこの対立を「個別の利害の必然的対立」としかみないのである。彼は例の人格的所有と手段の所有と排他的所有とをあえて同一視する所有の観念、あるいは欲求する者はみな消費者であるという規定を用いて「我々はみな所有者であり消費者であるという共通の利害で結ばれている。したがって貧者と富者、あるいは賃金労働者と雇用者とを本質的に敵対する階級とみるのは誤りである」と断定するのである(222)。

しかしそれにしても、彼には不平等を有益とする階層の存在が不安であった。彼は地主層を念頭において、富の不平等は不可避ではあるが断じて悪であり、それは社会が当初(革命によって)破壊をめざした権力の不平等をとりもどして社会を弱体化し、やがて社会を全面的に解体することになると警告し、社会組織は不平等と闘うべきであり(224)、そのことによって貧民の利益は社会の利益と一致すると宣言するのである(232)。

VII

上記にみたように、トラシは分配論において貧困の問題を発見したが、彼にはその現実的な解決策はなかった。だがつぎの消費論において、貧困の問題の解決も展望しつつ、理論的に、というよりむしろ観念的に強調された企業者中心の、あるいは企業者の万能に期待する産業主義の図式を示すのである。それは重農主義の地主起点説に代る企業者起点説ともいべきものである。

彼によれば、賃金労働者、地主、企業者の三種類の消費のうち、賃金労働者の消費はゼロと計算すべきである(235,243)。彼らの消費を支払うのは彼らを雇用する地主と企業者の手にあった賃金基金であり、彼らの消費は雇用者階級の消費の一部にすぎないからである。しかも彼らを雇用する二種類の「資本家」のうち、トラシがここで初めて「無為の資本家」と呼ぶ地主の消費についてみれば、彼らの消費の源泉である利子と地代収入は企業者の利潤の一部にすぎず、また彼らの消費は専ら個人的欲求の充足に当てられるのであるから、彼らの消費は再生産とは関係のない「全く不毛な」、セーのいう「不生産的消費」である(235-236)。これに対して彼が「活動的」と呼ぶ別の資本家、つまり産業の企業者は自分の資本だけでなく、「無為の資本家」の資本までも活用して、労働を組織し産業を指揮する。彼らの消費は莫大であり、彼らが雇用する労働者の数も膨大であり、たとえ彼らの消費の一部が家族の扶養等、個人的に用いられるとしても、それは「控えめな」額であっ

て、他の大部分は再生産のための投資、セーという「再生産的消費」に当てられるのである(237-238)。

トラシは消費論で二つのことをいっている。一つは産業の企業者の支出が経済の起点にあって、それがすべての消費をまかなうということであり、他は企業者の「再生産的消費」を最大限に確保することが産業主義の根本の課題であるということである。後者についていえば、これはむしろ基本的にはセーの理論である。トラシはなぜかセーの用語を用いずにこれを継承し、これを前者の企業者の支出起点説と結びつけて、企業者の役割を決定的なものとして示し、それによって、さきにはほぼ一定とした貧民のための賃金基金の増大の可能性をさえ示唆するのである。彼は地主の「不生産的消費」がゼロであることを願って、この「無為の資本家」が存在せず、ただ賃金労働者と企業者だけが直接に結ばれている社会について語り(240)、また消費論の後半では、地主の奢侈、つまり「不生産的消費」がいかに「労働を無にする」かを語って、企業者の「生産的消費」との著しい対照を示している(245-246)。この「再生産的消費」論がトラシの企業者論のそしてまた彼の産業主義論の最大の特徴である。

一方、前者の企業者の支出起点論はセーの理論にはないトラシ独自の観念的に先鋭化された産業主義の理論である。しかしそれは皮肉なことに、地主の支出が起点にあって、それが経済のすべてを決めるとした重農主義理論の単純な対称形である。確かに彼はここでは『経済表』を意識していた。生産論と分配論の分裂を「再生産的消費」論で緩和しようとするトラシは「不生産的消費」を賛美する重農主義の誤りを根本から正し、「再生産的消費」論によって、『経済表』をいわば産業主義的に書き変えて、そこに「みられるのは産業市民の資金循環以外のものではない」(247)ことを示そうとしたのである。だからこそ彼はそれまで認めなかった地主の資本家機能を、この消費論において初めて「無為の」とはしながらも地主を資本家の範疇に入れ、企業者がこれを借り入れること、また

それによって「無為の資本家」は「循環」を通じて「産業階級に入る」ことを認めたのである(248)。この循環の起点にあってこそ「産業の企業者たちは政治体の心臓であり、彼らの資本は血液なのである」(240)。

トラシはこういう展望のなかで、企業者の支出がいかに「大きな利潤」を伴って循環するかを自信をもって語った。企業者はその製品を生産費以上に売ることによってである、と(239)。しかしすでにみたように、企業者の支出が社会のすべての消費をまかなうのであれば、企業者が自分の支出分しか回収できないことはマルクスが揶揄したとおりである¹¹⁾。こうしてトラシが独自に描こうとする「大きな利潤」を伴う「産業市民の資金循環」は、まさに「再生産的消費」を強調するための彼独自の消費論によって、現実にはありえないものとなるのである。

VIII

これまでみてきたように、トラシの経済論には一貫して重農主義排撃の激しい論調がある。それは革命末期の総裁政府期からナポレオン体制、さらには王政復古期にかけて復活する地主主義に対する自由主義の立場からの当然の反応であったが、それがトラシの経済論をいきいきと鮮明にする面と過剰に反応して、その主張を非現実的なものににする面とがあった。彼は問題の困難にぶつかるたびに根元にさかのぼる。消費論の章の冒頭でも、こう述べている。「もし我々が最初の諸事実を見誤ったならば、もし我々が最初の諸原因にさかのぼらなかったならば、もし我々の研究が表面的で、すなわち体系の精神で惑わされたならば、我々は困難中の困難にぶつかるだろう」(233)。謎めいているが、これはコンディヤックの体系論に従って「最初の事実」にさかのぼって形而上学的な「体系の精神」である重農主義の誤りを見抜かなければならないということである。彼は絶えず「最初の事実」である意志と欲求にさかのぼり、そこから観念の系列をたどることによって、労働が欲求充足のための自分自身に対する「義務」であること、それはまた事実としてもすべての価

値の源泉であることをみいだしたのである。彼はまさに労働がすべてであるという「真理に出会った」のである(242)。しかし彼がスミスに従って労働価値説を示すかにみえるのは、おそらく理論の便宜のためであっただろう。まえにも述べたが彼は労働価値の理論を持っていたわけではなかった。彼はただ労働の観念と労働が価値を生むという事実だけを知っていたのである。だから彼はその観念と事実で地主階級を不生産的階級として排除し、賃金労働者と企業者は生産階級であるというだけで本質的利害の対立はないものとし、「再生産的消費」論ではついに「蓄積された労働を有用に用いつつ現実の労働に有用な方向を与える」(242)企業者の資本こそが生産的であるとするのである。

このようにトラシの産業主義は彼の観念学の制約のもとで、多分に観念的特性を持つものであったが、彼の貧困の問題への対峙は画期的であった。彼以後、フランスの経済学は社会的弱者を視野に入れた「社会経済学」の方向に向かって、その体勢をとるのである。

(一橋大学経済研究所)

注

1) 詳しくは、津田『フランス革命と産業主義』成城大学経済研究所『年報』第3号(1990年4月)、参照。

2) 主要なトラシ研究:[1] Picavet, F. *Les*

Idéologues, 189; [2] Allix, E. *Destutt de Tracy économiste. Revue d'économie politique*, 1912; [3] Van Duzer, C. H. *Contribution of the Ideologues to French revolutionary thought*, 1935; [4] Kennedy, E. *A Philosophe in the age of Revolution, Destutt de Tracy and the origins of "Ideology"*, 1978; [5] Keiser, T. E. *Politics and political economy in the thought of Ideologues, History of political economy*, 1980; [6] Welch, C. B. *Liberty and utility, The French Ideologues and the transformation of liberalism*, 1984; [7] Klein, D. *Condillac and Destutt de Tracy, History of political economy*, 1985; [8] Head, B. W. *Ideology and social science. Destutt de Tracy and French liberalism*, 1985; [9] do., *Politics and philosophy in the thought of Destutt de Tracy*, 1987; [10] 河野健二「経済思想」、桑野武夫編『フランス革命の研究』第4章, 1959.

3) *Projet d'éléments d'idéologie*(1801); *Eléments d'idéologie, I. Idéologie proprement dite*(1804); *II. grammaire*(1803); *III. Logique*(1805).

4) *Jefferson et les Idéologues d'après sa correspondance inédite avec Destutt de Tracy, etc.* éd. par G. Chinard, 1925, *Lettre*(21 oct. 1811), pp. 87-89.

5) *A Commentary and review of Montesquieu's Spirit of laws*, Philadelphia, 1811; 原版は *Commentaire sur "l'Esprit des lois" de Montesquieu*, Paris, 1819. (Liège, 1817 版は偽版)

6) *Eléments d'idéologie, IV et V, Traité de la volonté et de ses effets*(1815); *A Treatise on political economy*(1817); *Traité d'économie politique*(1823),

7) Condillac, *Traité des systèmes*(1749), ch. xiv.

8) Steuart, J. *An Inquiry into the principles of political economy*(1767), introduction. 加藤一夫訳『経済学原理』第1編, 11 ページ.

9) *Eléments d'idéologie. I. 2^eéd.*(1804), p. 175.

10) Say, J. B. *Traité d'économie politique. Liv. II*, ch. XI. 増井幸雄訳『経済学』下巻, 266 ページ.

11) 『剰余価値学説史』第1篇第4章第13節.